

ウル・プランバナ寺院遺跡群などを紹介されている。そして、それらから仏塔の構造の変遷を見ておられる。いずれも大野寺土塔とは程遠いとされているが、新羅統一時代の積石塔が岡山県熊山遺跡の石塔に類似していることから、東南アジアの仏塔の流れを引くものと考えておられる。唐の義浄がインドネシアのパレムバングに滞在中に撰述した『南海奇帰内法伝』に、南海ルートを使った新羅僧二人が記されていることに注目されている。実際に多くの遺跡を見てこられたうえでの指摘であるだけに、傾聴すべきご意見である。

最後に、本書を読み終えて感じたことは、いつの間にか自然と考古学への興味を呼び起こされたことである。本来は難しいはずの事柄を、読み手に分かりやすく説明されていることによるのである。

う。一度、本書を手にながら現地を探索してみたいという、そういう気持ちでいっぱいになった。きっと楽しく豊かな歴史散歩ができることであろう。そして、泉森先生が一番おっしゃりたかったことは、「現地に行つてよく調査をしない。そこでよく見て考えなさい。それが、研究の出发点である。」ということではなかったかと私は感じている。これは、どの学問にも共通する重要なことだと思えた。

（法蔵館 二〇一八年十一月刊 二〇〇〇円＋税）

永澤正好著

『田辺竹治翁聞書 四万十川Ⅲ—ムラに

生きる—』

嶺岡 美見

「翁の人生をのぞき見ればきらきらと輝く万華鏡のようだ」、本書の語り部である田辺竹治翁について著者はこのように表現する。

田辺竹治翁は、四万十川中流域に位置する高知県幡多郡大川筋村（現、四万十川市大川筋地区）に明治四十一年（一九〇八）に生まれた。翁は狩猟・河川漁労・農業に従事し、自然と共に生き、イエとムラの人間関係を大切にしてきた人物である。

著者と翁との出会いは、著者が大学一年生の頃、故和歌森太郎団長の宇和地帯の民俗調査にて故千葉徳爾先生の猪猟調

査に同行したときのことである。そこから四十数年余、著者は翁のもとに通い続けた。これまでに著者は翁からの聞き書きをもとに、狩猟を中心として記したⅠ巻「山行き」（法政大学出版局、二〇〇五年八月刊）、そして、四万十川の河川漁労についてのⅡ巻「川行き」（前掲書、二〇〇六年七月刊）を刊行した。本書はそれらに続く、Ⅲ巻でムラ社会を中心に四万十川流域の生活文化を詳細に記録したものである。ムラのハレの日のさまざまな行事や運営、そしてムラを生きる技術や知恵など、多岐にわたる内容となっている。それらを幡多ことば（幡多方言、東京式アクセント）で記録しているのが本書の特徴である。これは翁の語りを生かしたいとする著者の強い想いからである。

第一章は「山行き川行き働き者」とし

て、山と川に生きてきた翁の姿が記録されている。せんば（四万十川で輸送用に用いられた大きな帆を張る川船）乗りの話、そして、山の植物の活用の話など多彩な事柄が記録されている。山での話というと、たとえば、山中での方角を知する方法である。「夜は苔で東西を知る」や「風向きで分かる方向」など、自然と共存してきた翁の経験が本書には詳細に記されている。

第二章では「ムラに生きる」として、百姓としての翁の姿から当時の衣食住、そして、ムラの年中行事や交際など、イエとムラとの関わりが丁寧に記録されている。人の一生をムラとの関わりから知ることができる。

著者は翁からの聞き書きを通して、現代に生きる者に対し、とりわけ子どもには強い想いを語っている。「子どもの時代

は人間の幹の育つ季節」であり、「自然の中の遊びから生き生きとした何かを注入する子ども時代がないと、人間としての幹の育ちが悪くなるのではないか」と危惧している。竹治翁の生きた子ども時代のような自然とのふれあいは、現在では難しいのかもしれない。それでも四万十川をはじめ自然の中で人間の根源的な力を発揮できる場は至るところにあると著者は考える。

本書は、四万十川流域の生業・生活体験を豊富な写真資料とともに貴重な伝承として記録されている。日本のありふれた風景のなかで、繰り広げられてきた先人たちの生き方の一端を翁の語りが紡ぎだす。ことば（方言）を大切にした著者であるからこそ、翁の生きた豊かで力強い伝承文化の一端に触れることができる一冊となっている。ぜひ、ご一読してい

ただきたい。

なお、著者には本書以外に『四十川水の女―ぬしが難儀にや仕様がな―』（八千代出版、二〇一七年十二月刊）があることも付け加えたい。これは竹治翁の妻、米子さん（明治四十四年生まれ）からの聞き書きをもとにし、四十川流域の時代背景および生活文化が女性の一生を通して豊かに語られている。

著者は田辺夫妻から長年にわたる聞き書きをおこない、四冊の著書を執筆された。これは著者の丁寧な民俗調査の成果を示しているとともに、この夫妻が四冊にもおよぶ民俗の世界に生きてきたということを物語っている。

はじめに

I 山行き川行き働き者

一 山と川に生きる

せんば乗り

木材を運ぶ

石を運ぶ

二 山にはどんなもんでもあつと

―植物と生活

竹の活用

樹木の活用

境界に植える植物

茅の活用

カズラや蔓の利用

しらしめの明かり

三 家建て

家と材木

家の普請

こくやへ出して桂にする

棟上げ

草葺き屋根

神社の森の神木

四 山川に暮らす知恵

川原と瀬

山道と方角

雲定め・日和定め

風のいろいろ

大雷災とつえ

大水と水ハネ

II ムラに生きる

一 ムラの暮らし

土地柄

ムラの運営

二 百姓の暮らし

土百姓

家の暮らし

三 農作物の話

四 蚕の話

五 炭焼きの駄賃と木の搬出

六 ムラの人生

わかいしの生活

結婚

祝言、婚礼

産育―子どもの誕生と祈り

厄と祝い

葬式

七 年中行事

正月

春の行事

夏の行事

盆の行事

秋の行事

冬の行事

あとがき

(法政大学出版 二〇〇七年五月刊 三

六〇〇円＋税)